

アナ・K・ナード 著
辻 裕子・森 道子・村山晴穂 監訳
『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』



富田成子 著
『ジョージ・エリオットと出版文化』

出版革命のなかで読む、父なる存在の肩にのるジョージ・エリオット

今は昔、大半がペンギン版だったエリオット作品を、二十代、下線など引き読んでいた頃、この作家を男性と思いこんでいたことがあった、と、男性名ジョージにあやかってあらぬ作り話をしたくなる誘惑に駆られるのは、おそらく評者ひとりではあるまい。そう考えたくなる背景には、日常生活、果ては瑣末なゴシップまでも美の完成品に仕上げるオースティン、野生児から中年男性まで対象の一途な想いを詩的世界に仕上げるブロンテ姉妹、頑なに社会問題を追いつつセンチメンタリズムに流されもし、ときにちまちますらするギャスケルといったヴ

イクトリア朝女性作家たちのなか、エリオットがそこから少し離れた存在と見えてしかたなかったという事実がある。エリオットの問題意識はいともたやすく作品世界を飛び出す。棄教体験、フォイエルバッハやダンテといった英語外世界に開かれた複数の窓、学者の父と忍従の娘、晩年の結婚、都市ロンドンやフィレンツェを彷徨する知的女性、めくるめく神話世界、そしてヨーロッパ舞台の採用といった小説だけでは括れぬ問題もすべてその射程にある。さらに、男性名使用にからむ話を出した勢いで『Web 英語青年』という場への寄稿にあやかり穿ち過ぎ気取りぎりぎりと言えば、今、世界を覆い尽くす複数の「ウェブ」とても、見方によっては、19世紀エリオットが『ミドルマーチ』で用いた、個々人の関係を表現した比喻『ウェブ』に連なるものと言えなくもない。だから日本で文学から文化へと潮の流れが変わり始めた1980年代以来、エリオットは他の作家以上に文化を企図する者に広大なフィールドを用意する作家と映ったはずだ。ところが評者にとっては、文学と文化の包含関係をめぐる議論に深入りせずには、文学としてのエリオット作品との出会いが重要であったので、文化のなかに放り出されかかったエリオットに対しては、ウォーの『ブライズヘッドふたたび』風に言えば、若かったこともあり、それで「愛」が終わったかに思えた。以来、エリオットと言えば、硬質性に向かうときはなんと言ってもあのグギっとした文章が魅力と、また柔軟性に向かうときは金井美恵子が『猫の一年』で男性有名人を批評対象とするときにも似た文体が魅力と思い続けてきたものだが、エリオット世界のもつ文化的懐の深さがすくなくならぬ研究者に影響を及ぼしたことも事実。もちろん一般に文化に命綱を掛け替えるのも、結果として研究の命綱が世

界に何本も絡み合うことになり、それも「ウェブ」のエリオットに敬意を表するひとつのあり方と考えれば、壯観と形容するほかない。そうした折、この度、マルティン・ブーバーやバフチンを想起させるタイトルの『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』と、日本の電子書籍普及の只中であって、ある意味で時機恰好のタイトルの富田成子著『ジョージ・エリオットと出版文化』という文化に向かいつつも文学の沃野を広げる二冊の本が出た。『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』は『ミドルマーチ』のドロシアが美しき誤解のもとカソーボンに魅かれていく、その背景としてのミルトン父娘の存在に切り込むもので、父の肩にのる娘、過去の肩にのる現代と形容可能なエリオット版新旧論争の様相を呈する舞台装置が見え隠れすると言い換えて大きく外れない。『ジョージ・エリオットと出版文化』は、出版文化というエリオット初期には整備されていなかったシステムにエリオットがどう対峙し、逆に作家自身がシステムそのものにも影響を及ぼしていった過程をテーマとしている点で、未来に向かう作家の姿を前景化する。いずれの著作も多少の破綻も懐深く人前に晒す作家を対象としてこそ成り立つ開かれた研究書で、作品を読み終えてもなお文学にとどまることこれ節操と考える読者に、また作品に耽溺したあと、さてどうするかと途方にくれる読者に、作品の余韻に浸りつつ研究に向かう道を示す道標とも見える。(『ミルトンと対話するジョージ・エリオット』: 英宝社、2011年3月、四六判498頁、4,600円。『ジョージ・エリオットと出版文化』: 南雲堂、2011年3月、四六判360頁、3,619円)

——梅 正行 (中京大学教授)